歴史分野

歴史としての
ヨーロッパ・アイデンティティ

研究班代表
服部　良久

はじめに

服部　良久

今日の急速な政治・経済・文化のグローバル化は、現代人の活動や思考の枠組みを否応なく変化させつつあるが、それは学問においても同様である。私ども、西洋史研究者が対象としてきた世界では、いまEUによるヨーロッパ統合の発展の中で、新しいヨーロッパ史像の構築の試みが行われている。こうした試みは、決して新しいものではない。第二次大戦後まもなく始まった経済復興のためのヨーロッパ統合運動の初期、1953年に「ヨーロッパ審議会」が「歴史教育におけるヨーロッパの概念」をテーマとして国際会議を開いて以来、継続して歴史問題、歴史教育に関するシンポジウムを開いてきた。その中でヨーロッパ統合理念を各国民に浸透させるための、統一的なヨーロッパ史像の構築と、こうした歴史像に基づく歴史教育の促進が提唱され、そのための歴史教科書も編纂されたのである。しかしジョフリ・バラクラフがつとに指摘したように、冷戦時代が生み出す「ヨーロッパ共同体」理念のイデオロギー性のゆえに、「共同体としてのヨーロッパ史」像が著しく西ヨーロッパに偏っていたことは否定しがたい。

本年5月にEUは、1989年以後の体制転換と自立化によって「ヨーロッパ回帰」をめざす旧「東欧」の8ヶ国（他2ヶ国）をも加え、大きく東方に拡大する。さらに加盟をめざして様々な課題の克服に努力するバルカン諸国やトルコの動向も注目される。しかし当然ながら、そうしたヨーロッパ統合もまた、「ヨーロッパ文明」の本質と地理的範囲に関するある種の認識と無関係ではない。将来にわたるヨーロッパ統合のプロセスにおいては、キリスト教文化、議会制民主主義、市場経済、市民社会といったファクターを持つ歴史的な「ヨーロッパ」概念が天秤にかけられ、あるいは動揺を来たし、またその際には少なからぬ軋轢をともなうであろう。このような政治、経済、社会、文化にわたるヨーロッパ統合のヨーロッパ史研究への影響は、すでに様々な分野で確認される。

私たちは外国史研究者として独自のスタンスを維持しつつ、こうした動向の意義と可能性を検討し、自身のヨーロッパ史像の構築に努めねばならない。

私たちが研究会「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」を立ち上げた動機・目的はおおよそ次のようなものであった。第一に研究会のタイトルが示すように、ヨーロッパ人の自己理解、すなわち「ヨーロッパ・アイデンティティ」の特質を歴史学の視点から明らかにすることである。この視点は、ヨーロッパ史において重要な意味を持つ事象に関する、ヨーロッパ人の解釈、表象とその変遷を追うことにより、そこに映し出されるその時代の「ヨーロッパ・アイデンティティ」の特質を読みとるというものである。本報告書ではこの点に関わる成果として、次の論攷が挙げられる。まず南川論文は、ヨーロッパ人の共通の対象である筈の古代史研究が、実は各国の近現代史を映し出す鑑となっていることを指摘する。庄子論文は近代ヨーロッパ人の古代ギリシアへの眼差しの中に、彼らのアイデンティティとその揺れを認識し、中村論文は、「ノルマン・コンクェスト」をめぐるイギリス人の解釈の変遷を追うことにより、イギリス（イングランド）人のアイデンティティをヨーロッパ（大陸）との関係において考える。橋川論文は歴史家トインビーの、ロンドン大学に設置された近代ギリシア史・ビザンツ史講座教授就任と辞任(1924 年)の事件を通して、イギリス人とギリシア人自身のギリシア史認識、ビザンツ史の位置づけ等に関する特質と齟齬を照射する。また小山論文と杉本論文は、テクスト分析からより直接的に同時代のアイデンティティを読みとろうとする。小山氏は 16 世紀ポーランドの人文主義者マチェイ・ミェホヴィータの著作『両サルマチア論』から、ヨーロッパ東部辺境地域における著者独特のアジアとヨーロッパの境界認識と、ポーランドのヨーロッパ性を示そうとする著者の意図を明らかにし、杉本氏はモンテスキューの著作の中に、ナポレオンのエジプト遠征につながるヨーロッパ優越意識の存在を指摘する。

もう一つの目的は、EU の発展によって進行しつつある国家の相対化と、トランスナショナルな活動の活発化に鑑み、国民国家の枠にとらわれがちであった従来のヨーロッパ史の再検討を行うことである。こうした試みは、国家の中の（或いは複数国家に存在する）マイノリティや、民族・言語の複合する地域におけるアイデンティティを考察対象とする

ことによっても可能となる。原論文は主に15世紀以後のヨーロッパにおけるケルト概念をフォロウし、またケルト人というカテゴリを否定する最近の研究と、これをめぐる日欧の議論を紹介する。佐久間論文は18、19世紀の南ティロールにおけるドイツ語系地域とイタリア語系地域の境界認識の多様性と、イタリア語系住民のアイデンティティの複合性（イタリアとティロール）を明らかにし、19世紀初、対仏戦争期における彼らのアイデンティティの「イタリア化」の兆しを指摘する。

なお第二の目的と関連して、東中欧（ないし中欧）諸国における新たな自国史・地域史叙述の試みを批判的に検討し、この地域を「ヨーロッパ史」の中にふさわしく位置づけることも課題とされる。小山論文はこの問題にも関わるものであるが、東中欧史を考える手がかりとなるのは、羽場論文である。羽場氏はEU拡大によって「ヨーロッパ回帰」を遂げる東中欧諸国のアイデンティティ、経済と安全保障の諸問題を明らかにし、さらにEU拡大がもたらすヨーロッパの新たな分断と社会的弱者抑圧の危険性をも指摘する。服部論文は中・近世の東中欧諸国における頻繁な王朝連合と、複数の宗教・宗派の共存を、貴族・シュテンデの政治文化から考察し、西欧とは異なる東中欧史の特質から、東方に拡大する今後のEUのあり方をも考えようとする。

第三に、ヨーロッパ外において形成されるヨーロッパ系住民のアイデンティティにも目を向けねばならない。それはヨーロッパ・アイデンティティと密接に関連しつつ，彼らが自ら拓いた世界における自己認識の独自性をも映し出す。松本論文は、アメリカ（人）はヨーロッパを自身の起源とし、西洋文明を共有するパートナーとして認識しながら、他方で政治的、社会的にはヨーロッパを超克した存在としてのアイデンティティを持つと述べ、さらにアメリカがつくり上げたそのようなヨーロッパ像が、ヨーロッパ・アイデンティティに与えた影響をも問うている。堀内論文は、イギリスのケープ植民地におけるイギリス系、オランダ系（アフリカーナ）を結合する「テュートン人・アイデンティティ」をヨーロッパ・アイデンティティとして捉え、その形成が人種差別の進展と軌を一にしていたこと、他方で本国に対する差異意識は、田園的な農業ポピュリズムとして現れることを明らかにする。

本報告書では各論を、以上のような三つの課題にしたがって配列したが、もちろん扱われた問題と各執筆者の意識は、三つの課題領域の間を

行き来している。これらの各論の彼方に「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」の意味が浮かび上がって来れば幸いである。